都道府県別賞一等

身近な人から学べること

岐阜県　各務原市立桜丘中学校　三学年　信太　海翔

僕は今年中学三年生になり、もう入学してから二年も経った。とても早い二年間だったと今になって感じる。入学したばかりの頃を思い返してみると、新しい友達、初めての役割、部活動など、慣れない環境で周りが見えなくなる時もあった。家に帰ると規則正しい生活はもうできなくなっていて、その時の自分はそのことにすら気づいていなかったと思う。親に注意され、反抗する。自分のために叱っていると分かっていても、明確な理由もなしに否定する。そんな日々を送っていた。

ある日家庭科の授業で作文を書くと伝えられた。作文自体は特に苦手という訳でもなかったので、そこまで深く考えていなかったが、「生命保険」の作文となると話が違う。普段親と保険の話などしない。まだ早いと思っているからだ。いや、正直興味がないのかもしれない。授業のチャイムが鳴るまで考え続けたが、結局その時間内には一行も書けなかった。ためらう気持ちもあったが、このままでは何も書けないままなので、まず親に聞いてみることにした。母が話した次の一言の衝撃は、今でも鮮明に記憶している。

「父さんが海翔と同じ年の頃に父さんの父親、海翔のおじいちゃんが病気で亡くなってしまったそうだよ。」

自分は驚きのあまり黙り込んでしまった。気持ちを察した母は話を続ける。

「その時保険に入っていたおかげで学校にも安心して行くことができたらしいよ。」

こんな身近な所に保険が関わっていたのだ。母に「感謝」の言葉を伝えすぐさま父に話を聞きに行った。思い出したくないだろう話を自分からするのに抵抗はあったが、『これは知っておかなければならない』という気持ちに押され、真剣な態度で話を一つずつ聞いた。

話を聞いているとだんだん分かってきた。中学二年生で来年は受験生になるという中、突然の出来事に不安でいっぱいになったこと、その不安から救ってくれたのは保険だったということ。年齢が僕と近いこともあり、共感できる部分も多く、話を通して、「何がいつ起こるか分からない」という当たり前の言葉にも聞こえるが、大切なことを学んだ。初めは少し思っていた『作文の内容になるかも』という考え方はなくなり、親に言われるとやはり影響力が強かったのか、やがて自分の不安へと変わっていった。同時に『自分には関係ない』と思っていたことが恥ずかしくなった。

不安で焦るより、冷静になって考えてみることが必要である。今の自分は不安に備えることができているのであろうか。万が一ケガをした時に対応できると物事に全力で取り組める。僕はバドミントンという競技の練習に多くの時間を費やしていて、高校でも続けていきたいと思っている。だからこそ、「もしも」にしっかり備えておきたい。そこで親に聞いてみた。

何十分か経って、親が僕のためにどれだけ考えてきたか少しは分かったと思う。父の体験から慎重なのも影響しているだろう。僕は特に大事だと思った「生命共済」と父の「生命保険」について調べた。調べていて、少し前にバドミントンの事故で右目をケガした時のことを思い出した。親に「大丈夫。」と僕が言っても、病院を勧められたのをよく覚えている。今思えば、何よりも安心させてくれていた存在は親だったのかも知れない。ここまでは中学一年生の話。この頃から僕は少しずつ変わっていった。

今は中学三年生になり、またこの作文を書いている。保険に対する考え方は変わっただろうか。いや、尊敬する親からずっと学んできた僕は、きっと今までとは違う、前向きな考え方ができている。早くこの大切さに気づくことができたのは良かったと思う。これからもいろんなことに興味をもち、身近な人からたくさんのことを吸収していきたい。